デジタコ・DR

トランストロン

ネットワーク型が好調

運行管理機能を強化

クラウドでコスト抑制

富士通グループのトランストロン（加藤祐三社長、横浜市港北区）のネットワーク型デジタルタコグラフ「DTS―C1」と、ドライブレコーダー機能付き「DTS―C1D」の販売が好調だ。クラウドを活用した運行支援サービスの機能強化も図っていく。

DTS―C1は2010年10月、C1Dは11年10月にそれぞれ発売。通信モジュールを搭載しカードレスを実現。リアルタイムに車両位置や作業状況などを事務所側に送信するため、帰庫後にカードを読み取る必要がない。また、急ブレーキ・急ハンドル、長時間アイドリングなどの違反時には音声により警告する。

情報機器事業推進部の酒井健二氏によると、従来型のカード式デジタコからの切り替えも多い。保有車両50両で全国向け配送を行っている運送会社では年間180万㍑の燃料を消費するが、ネットワーク型デジタコに移行したことで、燃費が6%も改善した。「違反時にはリアルタイムに警告するので、ドライバーも記憶に新しく、運転を注意するようになる。長距離ドライバーに対し、帰社後に2~3日前の危険運転について注意しても反応が鈍いが、その場での注意は原因も思い出しやすく、改善につながるようだ」と話す。

ネットワーク型デジタコ専用のクラウドサービス「ITP―WebService」も提供している。運行支援やDR画像管理などを1両当たり月額2478~2793円で行うもの。

「コースごとの燃費管理も可能」と情報機器事業推進部の酒井氏

ことし1月には、ルート配送機能を追加。今後、更なる機能強化を図る。標準機能のルート配送ではコースごとの早配、遅配、店着温度の管理やコース別集計帳票の出力が可能。大手コンビニエンスストアチェーンで配送車両4000両に順次導入している。

酒井氏は「これまでの車両ごと、ドライバーごとの管理に加え、コースごとの燃費管理や事故防止対策も実現し、コース設計に無理がないかも検証できる」と説明。「大手の配送車両で導入実績があるが、クラウド化により保有車両の少ない中小事業者でも導入・活用しやすい」と話している。（吉田　英行）